

イエスが宣教のイエスが宣教の初めに見たのは、生きていくことに必死になり、イエスがそばを歩いていることに気づかず、網を打っている人々の姿でした。そして、イエスはその人たちに「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と声をかけるのです。ヤコブ、ヨハネの兄弟の家は「雇い人」がいるほどのある程度の財産をもつ階級であったと考えられています。漁師はガリラヤにあっては豊かな職業でした。イエスの福音は社会の下層の人々の立場に立つものでしたが、イエスと行動を共にする弟子となったのは、やはり当時のガリラヤの社会においては多少知識階級の人だったと思われます。私たちは、ともすると、自分自身がイエスを求めていると思うかもしれませんが。洗礼を受けるという決断を下したのは自分の意志であると思うかもしれませんが。けれども、その根底において、神さま、イエスが先ず私たちを求められ、声をかけられているのです。それは私たちの今までの人生が自分で決めたというよりは、神さまに導かれていたと思うようにです。その神さまの呼びかけから、神さまの業が始まっているのです。信仰とは、神さまの呼びかけに対する応答なのです。この物語はイエスの弟子たることの基本を明らかにしています。それはイエスの呼びかけに対する応答から生じ、イエスの後に従うことを意味しています。イエスに従った漁師たちの動機は問題ではないのです。もし人々に動機があるとすれば、それはイエスに「呼ばれた」ということだけなのです。

また、私たちが、単純に仕事や家族を捨てなければならないということではありません。私たちにはむしろ現在の職業に留まり家族のなかで暮らしながら福音の証人となるように求められているのではないのでしょうか。しかし、イエスの従う際の姿はこれらの弟子たちと異なっても、イエスの従うことが人生の最大事である点は同じなのです。イエスの招きの言葉「わたしについて来なさい」が今、私たちにも注がれています。決して、悲壮な決断をして、歯を食いしばって頑張っついて行くものではありません。自分には無理だと思って諦めてしまうのでもありません。私たちは、礼拝の中で、イエスの招きを受けて、立ち上がり、イエスと共に歩き始めるのです。それぞれが与えられた場所、家庭、仕事、学校などの中の神さまの招きがあります。その中でこの言葉を聞くのです。私たちは一人ではなく、インマヌエル、神さまと共におられます。神さまと共に、神さまを信頼し、従っていく信仰の歩みがあるのです。